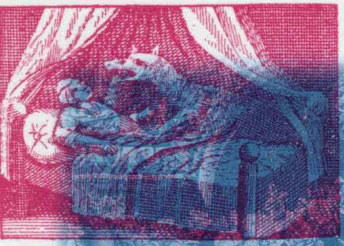


★赤ずきんちゃん

★猫大将、あるいは長靴をはいた猫

水野 尚

物語の織物
ペローを読む

PERRAULT

★親指小僧

著者紹介
水野 尚（みずの　ひさし）
1955年、静岡県磐田市生まれ。
慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了。
パリ第12大学比較文化・文学科博士課程DEA修了。
専攻　フランス文学
現在　神戸海星女子学院大学助教授。
論文　《Une note sur *Le Prince des Sots*》, *Cahiers Gérard de Nerval*, no.16, 1993.
《*Le Temple d'Isis. Souvenir de Pompéi* de Gérard de Nerval, ou la renaissance du culte oriental sous la Monarchie de Juillet》, université Paris XII.
「生きた神話 —— ミッシェル・トゥルニエにおける神話概念について」『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』、第33号, 1994年　他。

物語の織物 ペローを読む

1997年4月30日発行
著者　水野 尚
発行者　竹内淳夫
発行所　株式会社彩流社
東京都千代田区富士見2-2-2　郵便番号102
電話03-3234-5931　ファクシミリ03-3234-5932
組版　野ばら社
印刷　株式会社平河工業社　株式会社文化印刷
製本　有限会社青木製本
ISBN4-88202-443-8　落丁本・乱丁本はお取替いたします

工业学院图
藏

シャルル・ペロー
★
Charles Perrault 1628-1703

★赤ずきんちゃん

★猫大将、あるいは長靴をはいた猫

水野 尚

物語の織物
ペローを読む

CHARLES PERRAULT

★親指小僧

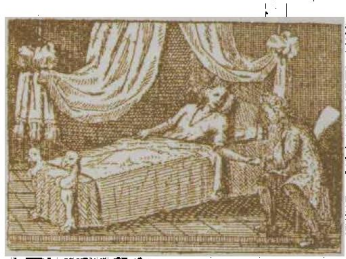
水野尚

物語の織物 ペローを読む

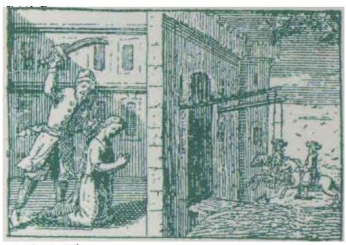
彩流社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

★サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴



★眠れる森の美女



★青ひげ

まえがき

一九九七年はペローにとって記念すべき年である。ちょうど三百年前、つまり一六九七年、フランスで『過ぎし時代の話（イストワール）あるいは物語（コント）、教訓付（*Histoires ou Contes du temps passé. Avec des Moralités*）』が出版された。「眠れる森の美女」「赤ずきんちゃん」「青ひげ」「猫大将、あるいは長靴をはいた猫」「妖精たち」「サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴」「まき毛のリケ」「親指小僧」。この八編の話の大半は、その後世界中で長く語り継がれ、人々の記憶の中に焼き付けられた。そして、今でもよく知られたおとぎ話として、私たちの心の中に残っている。

作者に関しては、シャルル・ペロー（一六二八－一七〇三）であるという説と、彼の三男で当時まだ未成年だったピエール・ダルマンクール（一六七八－一七〇〇）だという説があり、まだ完全には決着がついていない。しかし、私としては、いろいろなことを調べていくうちに、シャルル・ペローだという結論に傾いている。

彼は水戸黄門と同じ一六二八年にパリで生まれ、貴族の子弟の例にもれず法律の勉強をするようになるが、その一方で文学に熱中し、古典作品を滑稽な調子で語り直したりして兄弟や友人と楽しんで

いた。その後、重商主義政策で有名な国務大臣コルベールの下で文化行政に携わり、アカデミー・フランセーズの中心的な一人として活躍。科学と同様に芸術でも進歩は可能だと主張し、理想的なモデルと考えられていた古代ギリシア・ローマの作品よりも、ルイ十四世の時代に作られたものの方が優れているという考えに基づき、太陽王の治世を賛美する詩を一六八七年に公けにした。そのために、古代派の中心人物ボワローと激しく対立、いわゆる「新旧論争」が始まる。フランスでも日本でもペローの名前が文学史に出てくるときには、昔話の作者としてではなく、いつでもこの文学論争の当事者としてである。

『過ぎし時代の物語』もその議論と無関係とはいえない。彼は別の物語集の序文の中でこう述べている。――古代ギリシア・ローマの物語は非道徳的であったり、意味不明であったりする。他方、フランスに古くから伝わる昔話は、一見ばかげているように思えるかもしれないが、実は子どもにとって有益な種子を含んでいる。――これは、古代よりも近代の方が優れていると暗にほのめかしていることであり、近代派の主張と一致する。ペローの物語（コント）は決して子どもだけに向けられていたわけではなく、むしろパリやヴェルサイユに集い文芸を楽しむ王侯貴族たちを読者としていたのである。

コルネイユ、ラシーヌ、モリエールといった劇作家に代表されるフランス古典主義、そのもっとも輝かしい時代が終局を迎えようとする十七世紀の末、サロンにおける最大の関心事は人間観察だった。ルイ十四世の支配する宮廷社会では、伝統的な家柄を持つ武家貴族と経済力を背景に新しく擡頭してきた法服貴族がしのぎをけずり、国王はそうした対立を巧みに利用して絶対的な権力を維持していた。

その中で社会的な地位を占めるためには、個人の能力や才能ではなく、太陽王からの寵愛が決定的な重要性を持つ。宮廷社会の中では、自分たちの周りの人々の一挙手一投足を観察し、その場にふさわしい言動をすることが必要とされたことであろう。そこで、表面的な行動から人間の奥底にある心理を読み取り、簡潔に表現する「箴言（アフォリズム）」や、個人の特徴を捉えて一枚の絵のように言葉で描き出す「肖像画（ポルトレ）」といった文学のジャンルが流行した。それらは人間を考察の中心に据えるモラリスト文学に属するものである。そうした現実的な人間観察のかたわらで、世紀末には「妖精物語」と呼ばれるジャンルが流行し、『青い鳥』の作者オーノワ夫人をはじめとする語り手たちが、ファンタジーに富んだ物語で貴族たちを楽しませた。洗練された会話のかたわらで語られるそうした「妖精物語」は、徐々に活字として定着することになる。

ペローの物語集の場合、まず一六九五年に手書きの版が出される。そこには、「眠れる森の美女」「赤ずきんちゃん」「青ひげ」「猫大将、あるいは長靴をはいた猫」「妖精たち」の五編だけが収められており、これらは二年後の印刷版と比べると本文に多少の違いが見られる。題名にしても、挿絵に描かれた扉の上に「がちょうおばさん（マザーグース）の物語（CONTES DE MA MERE LOYE）」と記されているだけで、『過ぎし時代の話あるいは物語、教訓付き』と記されてはいない。昔話がそうであるように、語られるたびに少しずつどこかが変化したのであろう。

ペローが取り上げた八編の物語は、誰に聞いたともなく、どこかで読んだというのでもなく、私たちが自然に知っている昔話であると考えられている。そして、何となく知っていると思われているた

めに、三百年前のペローのテクストを実際に読んでみると、物語の展開や細かな描写だけではなく、全体から受ける印象もかなり違っていることに驚かされる。それは十七世紀後半と現代の社会制度や風習の違い、そして人間の心の様子が大きく隔たっていることによるからであろう。ペローの時代の読者と私たちとが、同じ物語を違ったふうに理解していることは明らかである。

『過ぎし時代の物語』は発表されたときから大変な好評を博した。ということは、当時の人々のなにがしかの期待をうまく満たしていたはずである。それに対して、後世の読者は何か不自然で奇妙な感じを受ける。ややもすると異様な思いにとらわれることすらある。その落差がかつての読者の「読み」へと私たちを導いてくれる。柳田國男はこう言う。

> これを後代の読者の立場から言うと、文芸の観賞の自然なる方法は、作者と同じ時代のただの人の心持に、なってみるより以上のものはない。彼等にはすぐに解って面白く、我々には講釈をしてもらってもなお首をかしげるという相違の、由って来たるところを究めるのが眼目である。
>
> （「口承文芸史考」）

ここで柳田の言うところの「相違」は、物語のあらすじといった大きな枠組みの中よりも、具体的な細部に現われることが多い。シャルル・ペローもそうした考えに異存はないようで、『寓話』の作者ラ・フォンテーヌについて以下のように述べている。

ラ・フォンテーヌの作品の中でもっとも優れていて、今後も永遠に生き続けると思われるのは、彼が翻訳をしたり翻案をしたイソップの寓話集である。彼はイソップの良識に自分なりの装飾を付け加えたが、そうした装飾は寓話にとてもふさわしく、分別があって楽しいものなので、これ以上に有益で快い読書をすることはむずかしい。

ラ・フォンテーヌは、自分の寓話を一から作り出したのではなく、多くの寓話の中から優れたものを選択し、元のものよりも優れた寓話にしたのである。

（『偉人伝』）

この言葉はそのまま『過ぎし時代の物語』にもあてはまる。ペローも数多くの民話や昔話の中から優れたものを選び出し、彼の時代にふさわしい「装飾」をほどこして語り直したのである。彼がほどこした「装飾」は、同時代の読者には当たり前のこととして受け入れられるが、時間の経過とともにわかりにくくなる。従って、当時の風習や考え方を何気なく描いているような記述を探っていくことで、十七世紀後半の読者がどのようにコントを読んだのか少しずつわかってくるし、また私たち自身タイムマシンに乗ってその時代を旅行しているような気持ちにもなってくる。

昔話に基礎を置きながら十七世紀の社会をくっきりと描き出す不思議なテクスト。その「織物」を紡ぐペローの言葉をたどりながら、私たちはルイ十四世の君臨するパリやヴェルサイユを旅し、王侯貴族たちのサロンを訪れることになる。ペローの物語（コント）を読む面白さは、そうしたタイムスリップ感覚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

を味わうことにあるといえるだろう。

なお、各章の見出しの下の挿絵はペロー自身のデッサンにもとづいてF・クルジエが制作した版画であり、一六九七年の初版印刷のおりに用いられたものである。

目次

まえがき

小さな赤いずきんと大きな狼——赤ずきんちゃん　15

望む女と待つ女——眠れる森の美女　41

森から宮廷へ——親指小僧　71

鏡に映る小さな灰——サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴

好奇心の鍵——青ひげ　131
人は見かけ——猫大将、あるいは長靴をはいた猫　161
ある鏡の物語——妖精たち　197
宮廷風会話術——まき毛のリケ　223
あとがき　247
書誌　252

小さな赤いずきんと大きな狼——赤ずきんちゃん

これまでの「赤ずきんちゃん」解釈

かわいい女の子が意地悪な狼に食べられてしまう。しかし狩人がやってきてお腹の中からお婆さんと一緒に助け出され、最後は悪い狼が罰せられる。この「赤ずきんちゃん」の話は誰でも知っているし、様々な分野の学問からも多様な解釈がなされてきた。

赤ずきんは太陽の、狼は夜の象徴であり、太陽はいったん夜に飲み込まれてしまうが再び昇ってくるといった自然神話学派の解釈。赤ずきんの赤い色は少女の月経のしるし、狼は残酷な男性性をあらわし、結局男に対する女の勝利が描かれていると考えるエーリッヒ・フロム（『夢の精神分析——忘れられた言語』）。さらに精神分析的解釈を推し進め、精神的な葛藤を克服しないまま思春期を迎えた少女の自立の物語だと考えるブルーノ・ベッテルハイム（『昔話の魔力』）。またジャック・ザイプスは様々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co